

ひびき

教育目標：「なかよく かしこく たくましく」

～ 夢と自信と思いやり ～

多治見市立共栄小学校 R4. 12. 1

タ・マ・ネ・ギを育てよう

いよいよ12月、冬休みももうすぐです。今年の冬休みは14日間。長い冬休みの家庭での学習・生活を通して自信を付け、「自尊感情」を育てて欲しいと願っています。

「自尊感情」とは、「子どもが自分に自信をもち、自分を価値ある存在であると感じる事ができること」と考えられています。『できないことがあって自分が落ち込んだとしても、できたことやできなくても、自分が行ってきた努力を思い出し、自分を肯定的に認めること』と言えます。ちょっとやそっとのことではへこたれない『たくましい子』がイメージできます。

ある調査によると、『自分に対して「肯定的」に捉えている子どもは他者とのつながりができているが、自分を「否定的」に捉えている子どもは、他者とのつながりができていないということ』も確認されています。つまり、自分を肯定的に受け入れている子どもは、他者ともつながることができる子どもです。そして、こうした子どもは集団の力をも高めていきます。自尊感情の育成は、社会性の育成にも欠くことができないと考えます。



では、子どもはどのようにして「自信」を付けていくのでしょうか。

・目標や目的をもって何かを熱心にするによって自信を付ける

取り組みの中で困難を感じたり、挫折を感じたりすることもあるでしょうが、周りの大人から自分の行動を価値付けてもらったり、評価してもらったりすることで自分自身の価値を見出していきます。

・自分の話を聞いてくれる多くの人とつながることが子どもに自信を付ける

自分について相談する人数が多い子どもほど自信をもっています。

・「できた」という達成感をもたせることで自信を付ける

『やり遂げたという自分の思い』と『周りの評価』が一致したとき、大きな自信となります。

こうしたことは、今でも、地域・家庭・学校で大切にしようとしていることです。今まで地域・家庭・学校で大切にしてきたことが、子どもにとって大切な「自信」を育てていると捉え、更に充実させたいと願っています。冬休みはぜひとも、愛情たっぷりの畑（家庭）で、『我が家のタ・マ・ネ・ギ』を思う存分育てましょう。

「自信」・「自尊感情」は、自分一人だけでなく、周りの人たちとのやりとりの中で身に付けていくことを次の文からも紹介します。（「自己効力感」＝「自信」は「タマネギのような構造」をしているというものです。－「自己効力感」は「自信」と読み替えてもよいと思います。－）

真ん中に青い芯があり、自分がしたことを自分でいいとわかるのが、その青い芯である。タマネギの芯が暑さや寒さに弱いと同じように、自分だけの評価で作った自己効力感は、難しい課題と障害にぶつかったらすぐにしおれてしまうのである。

親がほめる、友達がほめる、学校の教師がほめる、いろいろの形でほめていくことによって、自分なりの自己効力感の周囲が皮で一枚二枚と覆われ、タマネギのような形になる。そうすると少々の壁にぶつかっても、失敗しても、今度こそ頑張るぞというしっかりした自己効力感になっていく。

（池田 寛 氏「学力と自己概念」より）